
妹と言う名の悪魔{パーカークトグレード}

愚図男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹と言つ名の悪魔へパーソナライズド

【Zコード】

Z2501D

【作者名】

愚図男

【あらすじ】

主人公の前にいきなり現れた悪魔な少女、四級悪魔レイミ、魂半分で願いをなんでも叶えるそうです……たぶん？

悪魔はまだやつて来ない（前書き）

短編のを連載せても「もうつかと……………」色々未熟ですが、よろしくおねがいします（^__^・）

悪魔はまだやつて来ない

土曜の夕方リビングにて俺は…

「あんたってホント最低…！」

「バ'コッ…！」

「アベシ…！」

一つ歳の違う妹に殴られていた

ことの発端は妹の憧れの先輩であるサッカー部のHースでモテモテの藤堂（俺とはタメ）を殴ったことから始まつた
だつてや……あの場合殴るだろ、

昨日のこと学校から帰ろうと下駄箱から靴をとつて履くと

訳あって帰宅部です

なんと話しが聞こえてくるではありますか…！

藤堂のヤツです、今から部活に行くのか仲間達と話しているみたい
です。

「あの話しなんだけど、あれマジか？」

「ああ、あれだろ」

「例の女だろ？」

「てかあのやり方でマジで女が釣れるとは思わなかつたぜ」

「ホントホント、てか藤堂さすがだな」「だから言つただろ落とせるつて」

と、言つてどいつもこいつも笑い始めた

「はー、マジウケル、後はヤルことやつて協力してくれたお前らにきちんと回してやるからよ」

「お、わかってるねえ頼むぜ藤堂」

ガラガラと勝手に窓を開け始めた

「おい、高校一年の分際で10時帰りか?」の不良娘め

夜の10時です

「いいじゃん、どうせお父さんもお母さんも仕事で遅いんだし」と言つて、人の話しなんぞ聞いちやいない

「まだ出てかないのか?」

人の部屋に勝手に入り俺のベットでくつろぎ始めた

「ねえねえ、今日のことあつたんだけじ聞きたい」

そつ言い人のベットの上で「ロロロロし始めやがった

ウツゼ~!~!~!

話したいんだる?

こんな時は聞いてやるのが一番だ

とつとと聞いて自分の部屋に戻つてもううのが一番だ

「ふ~ん、で何したの?」

ソファーでくつろぎながらタバコを吸っていた俺はそれを灰皿に押しつけ目の前にいる妹に目を向ける

すると妹はニットと顔を微笑ませ寝ていた体を起こしてベットに座る

「今日、友達と学校帰りに遊びにいつたの？」

妹は今日起きたことを身振り手振りで話す

要は友達と遊んでいるとタチの悪いナンパ集団が絡んで来て逃げようにも囮まれてしまい困つてはいるが、

「
ふ
ん」

「それがねその人はなんとー、うちの高校の藤堂先輩だったのー！」

藤堂？……あ、サッカー部のね

「しかも！あの藤堂先輩が私に今度、デートしようって誘ってくれたの」

と、今にも昇天しそうな幸せそうな顔でクッショーンを抱き締めた

「ふうん良かつたね」

なんか、悔しいような寂しいような気持ちに俺はなつた

自分のノロケ話をして気がすんだのか
もつ寝ると言い部屋をでていった

てのが昨夜の話し

「お」

俺は迷わず目の前の奴等が妹のことを話しているとわかり
藤堂の肩を掴んで呼び止めた

「は？何だよ」

呼び止められた藤堂はつづたそれにおれを睨んで
肩に置かれた手を払った

「テメエ、今の話し本当か？」

「だつたら何？お前に関係あんの？」

藤堂は俺の方に体を向け直すと
俺の胸倉を掴んできた

「人の話し盗み聞きしといてさ、いきなりなに？」

お前こそ何だ？ただ呼び止めただけでその喧嘩腰は

「なんかさあ、あなたの顔氣に入らないんだよね」

そりやどりも

「そんなんどうでもいい、確認のためだ
わざわざ話してた女って一年の斎藤明香か？」

「だったら何？」

すると藤堂はその整つた顔をニヤリとさせて言った

「ふうん、もしかしてあの娘に惚れてるのかな、今の話し聞いてム
キになるのは？」

「…………」

「『メンね、あの娘今俺に惚れてるみたいだから
そうだ、ヤリ飽きたらお前に回してやろうか？ハハハハ！…！』

そろそろ我慢の限界だ……まあ、元々我慢する氣はないが

「腹いてえーーーあの女もお前もバカみてえ、お前らもやつて思つだ

「…………」

藤堂は今まで他の奴等が後ろに立てるものだと思い話しかけたがしかし返事が帰つてこない

「あ、あれ？」

その頃他の奴等は……

「はあ、はあ

走っていた

「や、ヤベHよアイシ斎藤だよなー!?

「ど、どうする…? 頭覚えられてねえよな!?

「し、知るか!…とりあえず俺今日帰る!…んで明日も休む!…!

「お、俺も!…」

「な、なんだ? アイシら部活行つひまつたのか?」

藤堂は辺りを見回している

「おー」

「あ？」

アーヴィングー！

「ウ！」

ズザザザー

おもづくを殴つてやつた

「な、なにひやがる！？」

藤堂は何とか起き上がらうとしているが、起き上がれないようだ

なあ、お前人の妹をどうするって？」

言いながら藤堂の胸倉を掴み起こす

二〇一九

「次に妹に近付いてみる、これだけじゅすまさねえ」

そうとう驚いたのかそれ以上言葉を話さずただ首を縦に振るだけだった。

「ああ～てと」

パツ

掴んでいた胸倉を放してあげた

「おい、残りのアホどもの名前とクラス言え」

名前とクラスを聞きました俺は、撲滅リスト（メモ帳）名前を認め
奴等が逃げ去つた方角へと猛烈ダッシュした
その後の彼等は『想像におまかせ致します。

そんなことがあって今リビングで倒れています。

悪魔がお家にひりつた（前書き）

— |話題の更新がかなり遅れました、申し訳ありません。
読みでやつてください

悪魔がお家にひつてあた

はあ～

人の話しなんぞ聞やしねえ！！

苛立つた俺は階段を昇り自室のドアを開けた……

「や、こんちは」

変なのと田が合つてしまつた

金髪ストレートの髪が肩まで田の色はブルーで背中から「ウモリ」の羽根みたいなのが出でいて

黒いレザーのブラ？黒いミニスカに長い黒ブーツでキメた整つた顔の少女が怪しく笑いながら俺の机の上に座つて足を組んでいた

とつあえず俺は

「寝よ」

寝ることにした

ベッドに横になり布団を体にかけよつとしたところ

「あ、ちょっと待つてよーーー！」

かなり慌てたのか、呼び止められた

「チツ……」

「普通こんな所に人がいたら驚くでしょ！？しかも、舌打ちって！？」

のつそりとベットから起き上がりベットに座り少女の方へと田をやる
すると、待つてましたとばかりに
ヒヨイと机からおりて仁王立ち……て、背小さ…。

「聞きなさい人間！！！」

この私△四級悪魔△

レイミ様が今ならなんと！！

魂半分であなたの欲望を叶えてあ・げ・る 」

決まった、と言わんばかりの顔で人差し指をこじらせてしながら言
つた

「フフ」

「……」

なんと言いますか、

イマイチ迫力に欠ける

たぶん、

150あるかないかの背丈のせいである

それに四級悪魔ってのは凄いのか？？

「フフ」

「……」

「フフフ」

「…………」

「フフ……」

「…………」

「…………あ、あの何か言つ?」といいかなあ?」

長い沈黙に耐え兼ねたのか話しかけて来た

とつあえず機嫌が悪いので

「…………帰つてくれ」

帰つてもううつこと元に戻した

「え?」

「帰つてくれ」

帰れ!—今すぐ帰れ!—

相手の目を見て誠心誠意、真心込めて言つた

「…………は、はい」

意外と素直な性格らしく、瞳に涙を溜めて今にも泣き出しそう顔で
侵入したであらう部屋の窓に足をかけた……

「あ」

「えー、なになになにー?」

泣き顔は一変して笑顔で「ひょりよつて來た

「帰る時ちゃんと窓閉めて行けよ」

四級悪魔と名乗る少女はかなり落ち込み帰つていった

「ハア~……マジで何だつたんだ?」

今の出来事により一層疲れが増した
つこでに小腹も空いた

キッ chinに行くためドアを開けた時、丁度妹も部屋を出ていたらしく廊下へ出たところで鉢合わせをしてしまった

(丁度いい謝つてしまおうこれ以上ギクシャクするのは嫌だし)

「明日番、その……」

「……兄さんほんどうして私の邪魔するの?」

「いや、邪魔とかじや……」

「言い訳しないで！！ホント最悪！！」レジや藤堂先輩に顔合わせられないじゃない！！」

「…………ああそれでいい、オマエの男見る目は無さすぎだ」

キツいかもしれないがここは譲らない

「もういい！！人に手を出すような兄なんかイラナイ！！」

「…………」

そう言つてまた部屋に戻つて行きやがった

「チッ！！人の話しなんか、聞きやしない！！

俺だつてな、もつとちゃんと人の話を聞く妹が欲しかったよ！..」

わざと聞こえるようにかなりデカイ声で言つた

その後は夕飯を食わずにそのまま寝た

悪魔の心配（書類）

頑張りました……

悪魔の仕業

翌朝

……………

ガチャツ

……………

ガチャツ

……………

「田代まじの分際でいい根性じてゐるじゃねえか」

昨日に引き続き朝から胸へと悪い

「ハア～学校かあ～ダアリイ～…………ん？…そつでもないな今日から
また部活に出れる…………」

田も覚めたので下に下りる

リビングに入ると母親がキッキンで朝食の準備を済ませ食器を洗つ
ていた

「おはよ…………あれ？ 明日番は～？」

「おはよー、明日香なら朝食食べて学校に行つたわよ」

「まだ7時15分だぞ早すぎないか？」

「あら？ せう言われれば、あんた達またケンカでもしたの？」

「……別になんもしてねえよ」

さすが母だ鋭い

「まあ、いいわ早いとこ食べちゃつて食器が片付かないでしょ、母さんも仕事に行かなきゃいけないんだから」

「はいはい、いただきます」

椅子に座り飯を盛り込む、やっぱ朝はごはんに味噌汁だろ

「ふあーーおふあよーー」

「うーーす……」

「あら、おはよーシャキッとなれー、ご飯食べて」

「フアーー」

あれ？

飯を味噌汁で流し込んでいたところで動きが止まった

「えええ～パンじゃないのぉ～？朝はパンがいいのこい～」

と、お袋に文句を言いつてこる俺の隣に座つてこるヤツに皿をやる

「我慢なさい」

「ふうーー」

と、何やら不満そうに朝飯を食い始めた

(……あれ？こんな家の居たつけるか？
いや、居ねえ、しかも朝はパンだと！？
この西洋かぶれが日本人なら米を食え！—！)

「うううそつせまあ

パタパタと駆けて行きそつなどいろいろで

「マテやコラアアー！」

ガシリとヤツの頭を驚撃みする

「いた、いたい！」

「ん！テメは昨日の！？

こんなどこで何してやがるー！？」

すると少女は慌てて

「あ、あれ記憶操作の魔法がきいてない！？」

は？記憶操作？魔法？

何やう訳のわからん単語が出てきた

「てか、マジで何なんだテメエは！？
何者だ！？」

すると母は何やうすっとんきょんなことをぼぞん始めた

「何者つて？礼美ちゃんはアンタの妹でしょ、朝からふざけたこと
してないでサッサと学校に行きなさいよ」

な、なにイー！？

「いやいやーー、ちよつとまてーー。」

玄関でヒールを履いて今にも家を後にしそうな母を追いかけ呼び止
める

「コレが妹だと？」

頭を鷺掘みにし持ち上げてコレを指差す

「痛い、痛い……」

「おこ……母よく見ろなぜ日本人のアンタからこんな髪金の目の色
が青いやツが出てくるひんだ……」

グイッとヤツの顔を母に近づける

「何故って、遺伝子のナンタラでこいつなつちやつたんだから仕方な
いでしょう」

そう言つて母はドアに手を掛け

「じや、お仕事に行つてきます」と言つて残し去つていつた

「い、遺伝子のナンタラつて……」

何故に母親のアンタが病名を知らない

一気に力が抜けて掴んでいたヤツの頭を離した

「イツタ～イ……首の骨が抜けるとこだつたじやない……

下等な人間がレイミ様に手を出すなんて百年早いのよ……」

手を離した瞬間元気になつたのかワーワーと偉そつて手を組んで、
チヤゴチヤとちんまい身体でぼさき始めた

「…………おこ」

「だいたい、ヒツー！」

何やら長くなりそうなのでイリッシュときた

「俺の質問に答えてねえだら、何でココにいる？」

両方のホツペをムギュッと片手で寄せせる

「ふあつて、ファファヒフオひふ……」

「あああ？ 何言つてか解んねえぞーーー！」

と、いつた具合に炎を添える
さつき、下等な人間とか調子こいたこと言つてたからな
手を離してやる

「だ、だつてだつて人の話を聞く妹が欲しいって叫んでたじやない！」

今にも泣きそうな顔になり目に涙を溜めている

「は？」

意味が解らん

「願い事叶えたんだから魂をわた…………た、魂を半分ください」

また調子に乗りそつなのでシッカリ脅しを効かせた

「……………今すぐ帰れ

「か、帰らないもん……」

今日から家族に妹が追加されたらしい。

「ねえ、マジ帰つて

「か、帰らないもん…………」

その事を認識してるのは俺と、コレだけらしい

登場人物1（前書き）

一応作ってみました。かなり下手くそです
(- o -)

登場人物1

斎藤 兼定
さいとう かねさだ

17歳、高校一年の主人公

身長177cm

生まれつき目付きが悪く中々交友関係に恵まれない性格、女好き（年上限定）残りは力スと断言やや狂気的な一面が会つたりするが実は優しいしかし、それを理解してくれる人は数少ない本人はけして不良ではないと言い張る

レイミー（礼美）15歳の四級悪魔

身長140cm本人曰く150cmだと言い張る

ブロンドのストレートヘアを肩まで伸ばした目の色ブルーの日本人とは思えない外見

性格、明るく中々いい根性をした団太い女の子、頑張り屋で憎めないヤツ

自分の幼い体型にコンプレックスをもつまだまだ未知数なヒロイン

斎藤明日香
さいとうあすか

16歳、高校一年の今時女子高生、主人公の妹

身長160cm黒髪ショートカットのボーリッシュな女の子

性格、外見とは違いかなり乙女の所が多くある優しい子言い寄つてくる男子が多く、いつも男子と付き合う手前で兄の兼定に邪魔される（本人にその気はない）

そのたびにケンカをする

兄曰く

「男を見る目が無さすぎ」だそうです

母

38歳

只今一家の大黒柱

仕事はできる、家事はお手のもの、まさにパーフェクトな母

怒ると恐い

父

39歳

2日ほど前に浮気がバレて家を追い出された、明日香には単身赴任と知らされている

只今必死に母に謝っている

戻ってくるのは、まだまだ先になりそうだ

悪魔な一日の始まりー（前書き）

読んで頂けると嬉しいです

悪魔な一日の始まり1

「…………」

「…………」

その後、学校に遅れてしまつとこつ理由によつ、コマイシのじとせが
準備を済ませて玄関を出て気がついた

田の前にはあの悪魔がチャツカリ制服に着替えて立つていた

「…………一つ聞いていいか?」

「Hーあつ、はー…………」

何やうチヨット歯切れが悪い、アレカさつきのお灸がきいてるみたい
いだ

「なぜ、うちの学校の制服を着ててる?」

それが疑問だつた

俺が行つてゐる高校は男子黒ブレザー、女子黒セーラーのまあ普通
の高校だが

そのセーラー服を着ていたのだ

「え?あれ?学校にはコレを着ないと行けないんじやないの?」

そう言つてワタワタと自分の制服を確かめる

いや、合ってはいるよ

「いやいや、そうじゃなくてだな

なんでもうけの学校の制服を着てココに立っているのかと

ワタワタしていたのが止まり

そもそも当然と言わんばかりに

自分の胸に手を当て

「学校に行くのは当然のこと……なんと言つても学生は……」

「違う……何で悪魔のお前が学校に行く必要があるんだ……！」

そう、これは大切な事だ

「だつて、一人で家にいるなんて寂しいもん！

それに私にはアナタを監視もしくは魂を半分貰わないといけないと
言つ使命があります……！」

ビシッ……と人差し指を突き付ける

「ア、アレ？」

しかし、指された指は空を指していた

周りを見ると走り去っていく後ろ姿が目に付いた

「あ、チョット待つてよ……」

悪魔な一日の始まり②（前書き）

結構な長文になってしまった。読んでやってください。

悪魔な1日の始まり2

ダダダダ

「ハア、ハア、ハア」

今、俺は力の限りあの悪魔との距離を離すため全力疾走している

「ま、待て～！！」

俺が逃げたのがわかつたのか悪魔もダッシュを始めた

(フン、バカめ俺は足に自信があるんだよ)

最初のスタートで10メートルほど離したし後は余裕……

「待つてよお！！」

11

いつの間にか俺の横を走つてやがつた

「何で走るの！？」

「ウル」

マジでかー?.

「ハヂ、ハヂ、ハヂ」

300m位疾走する悪魔と俺、それにも関わらず俺はすでに息がもう……

「うわっ！？」

その時だった横を走っていた悪魔は何かに躊躇いたらしくそのまま

ズザーアーとヘッドスライディングをしながらこけた

（フハハハハ、俺の勝ちだ）

何とかプライドを保つたとそんな小さい事を思いながら駆けていった

「ううううう、痛い」

私はヘッドスライディングしたままのうつ伏せ状態で痛みに耐えていた

「何なのよ、いつも私ばかり…………」

そう、「こんな」とは今に始まつた事ではない思えればやつ、あひちの世界でも…………

それにここに来るときだつて…………

それに、あの男のこの私に対する扱い…………

「グスツ」

少し泣きたくなつてきた

「おこ」

「…………つらうグスツ」

「オイつて」

「ふえ？」

顔を上げると先程追いかけていた、あの男がいた

「こつまでもそんなとこで倒れているのはみつともなこぞ、ほら」

そつまへしゃがんで手を差し出してきた

「…………」

予想外の出来事に

彼の顔と手を交互に見る事しかできなかつた

「ハアアアアたく、しゃ あない
中々手を取らない私を見かねたのか

「うわっ！」

うつ伏せの私のわきを持ちそのまま私を立たせた

「服の汚れくらい払えよ」

まだ、ボーとしていた私に彼は言った

「…………」

ポンポンと上着とスカートを払った

「ほれ、学校行くぞ」

歩こうとしたとき

「痛っ」

膝小僧から血が出ていた

「怪我したのか？」

先を歩いていた彼は声に気づいて
後ろにいた私の足を見て

「結構酷いな、こいつからだと学校に行くより一回家に戻った方が早い、歩けるか？」

「……痛つー」

「歩けやうにないな」

「まつはひで腰中を向けてしゃがむと

「まつ、乗れよ」

「え? こ、ここよ」

「でもソレじゃ痛くて歩けねえだら」

「で、でも……」

「……乗れ」

「ハ、ハイ」

あまつにも田が怖かったので言ひ通りにした

しまへへおどぶをしてもひこ、家に戻ってきた

ドアを開けてそのままお風呂場まできた

「シツカリ、傷口の砂を洗い流せよ」

卷之三

ジャーとシャワーを出して傷口に当てる

「二二一」

「染みるけどちゃんと洗わないダメだぞ」

洗い終わるとそのまま

え？あれ！？ち、ちよつと！？／＼／＼「

なんとそのままお姫様抱っこをされた

「いいや、うるせえなあ、こちのが楽なんだよ」

そのままキッチンに連れていかれ椅子に座らせられた

ちよし 待てな

タタタと一階へ駆け上がつて行つた

...
[REDACTED]

(おんぶなんてされたの初めてだつたな……それにお姫様抱っこつて／＼)

なんてことを思つてゐると、一階から彼が降りてきた

そして私の前でしゃがむと

「ほれ、怪我したほうの足出せよ」

言われたまま、足を出す

する以外と手際よく傷口に下処理をしていく

滲んだ血を消毒液を含ませたティッシュで一度拭き取ぬいたの上に
軟膏を塗りガーゼして最後に包帯を巻いた

「慣れてるね……」

私はボソッと言つた

「あ？ まあ結構ショッちゅう怪我するからな、慣れだ……」

そう言つてひょんとうだけ寂しそうな顔をした

「他はどうか怪我してないか？ 手見せろ」

言われて手の平を開いて見せた

「よし、じゃあ後は大丈夫だな……後、悪かったな」

そう謝つてきた

「え？ なんで？」

「いや、結果的に転ばせて怪我させたの俺せいだしな、それこそ
つき泣いてたろ？ だから悪かった」

「ほれ、怪我したほうの足出せよ」

やつらと頭を下げて謝った

「い、いじょにしてないし！私の方が余計に気を使わせたみたい
だし……」

「……」

「……」

チョットの間沈黙が続く

「あ、ヤベエ遅刻だ」

やつらは時計を見ると針は8・20を指していた

悪魔な一日の始まり2（後書き）

評価して頂いた方々へ
大変ありがとうございました
参考にさせて頂く所や意欲を沸かせて頂く所をありがとうございます。
後々感想を頂いた方に返事を書こうと思います。
だいぶ遅くなつてしましましたスミマセン

これからも宜しくお願いします。

悪魔の事情（前書き）

大変申し訳ありません、諸事情により更新出来ませんでした。
また読んでやって下さい。

悪魔の事情

「ハア～、完全に遅刻だな」

諦めたのかドカッと隣の椅子に腰かける

「う、ゴメンなさい」

「いいつて気にすんな、まあ一時間以上は間に合つよつて行くべ

時計の針が動いて行く

（ハア～、初日から大変な」とばかりだなあ～）

そう思いふいに横に座る彼の顔を見る

（昨日と今日だと別人みたいだなあ、怖いだけの人かと思ったけど
……）

「ん?なんか忘れてねーか?」

（怖いけどこの人本当は優しいんだ……）

「ん~ん?何だっけ?」

怪我をした所を見る

（誰かに手当てして貰ったの初めて……それに、なんだかせつき
から胸がドキドキする……あ~これが……こ……）

「そうだ！！テメエのことだ！！」

ガタン！！

座っていた椅子から立ち上がり物凄い形相で私を見ていた

「はわあーーー！」

驚いて椅子」とひっくり返る

「お前がなぜ！」居やがるーー？」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………あれー？話してないつけ？」

「話してねえよーーー！」

田の前に座る悪魔の話しさは微妙だつた

「本来、人間は体に一つの魂しか宿してはいけないのだけど、ごく希に2つ宿してしまう人がいるの、どうしてそうなるかは未だに解明されてないので」

「はあ～」

「2つの魂を宿した人間は天国と地獄に大きな災いをもたらすと言伝えられているのです」

「ほあ～」

「で、て……真面目に聞いてよーー！」

「聞いてましたよ

ただ話がぶつ飛びすぎて解らん

「ソコで魂を貰う替わりに

この四級悪魔のレイミ様自らが下等な人間の住む地に降りて来てやつて、人間の願い事を一つ叶えてやつて魂を貰うわけなのーー！」

バシッと座っていた椅子に仁王立ちして見下すように言った

「ほ～お、テメエは学習能力が相当無いようだな、ああ？」

「出でる釘は打たないとな、これ常識

「…………グス、『めんなさい（涙）』

「…………ズキ」

打ちすきにも注意しよう

「それで、魂を一つ渡せばお前は帰ってくれるのか?」

「うそ、帰るよ」

「じゃあひとつ持つて行け」

「え?でも魂を引き剥がすと死ぬよ」

「…………聞いてねえぞ」

「…………言つてないもん」

ブチッシッ---

パソコン

「痛い!…な、何で呪ぐの!-?」

田元を涙で濡らし猛抗議してきた

「…………今日は叩くだろ、かなり大事な部分をすりぼしたテメホ
が悪い」

「で、でもお叩かなくてもいいじゃんー…？」

その後もギャー・ギャー喚くのがかなりウザかった

「んで本題に戻してもいいか？その魂を引き剥がすのを断つた場合
はどうなる？」

「えー…断るの？」

俺の一言にかなり驚いたらしく
ポツケから何やら本を取り出した、
それを開き読み始めた

「うーんと……目次、目次、えーとねえ 214ページ

何やら部厚い本を取り出しけページをめくる

(ん？今コイツどうから本出した？)

そして机に座り直し本を立てて読んでいる背表紙には

“ 悪魔の初めての仕事・初級 ”

御丁寧にフリガナまで書かれていて、しかもなぜ日本語？
色々突っ込みたいところだ

「あつたあつた、えーと……魂を取れない場合は行動と共にし、奪
い取ってください。……ね」

眼を輝かせ宝物を見せる子供のよつとやのページの一文を指差す

「だから、しばらく私はココに住まないといけないのです」

なぜ？ そうなるのかわからんが

「…………」

「よろしくね」

「マイシが家族の一員になるのは決定事項のようだ

悪魔と通学はなかなか進まない（前書き）

あ～何か最近時間が進むのが速く感じます。一〇のまま一気に歳を食つてしまいそうで怖いです。

悪魔と通学はなかなか進まない

何やひ話が「チャヤ、チャヤしてきたので
「…………そろそろ学校行かないと」
スルーする」とした
あの芸人も左に受け流せと歌っていた
「え?、ねえねえ」

流されたのがわかったのか、「のびのびひしゃせつあくビングを出
ようとする俺を止めに入った

「まだ話が終わってな、ふぎゅー?」

「つわゆー、むぎゅー」

といつあえず、ホッペを片手で掴み話せなくする
もつ、朝からダルいコイツのお陰で考えるのが面倒だ

ぽん

「な、何するのよー。」

話を遮ったことに不満なのか、やけに御立腹だ

「……ウザ、とつあえず帰れ」

とつあえず本音をぶつけたみる」とした

「へ、へんなやくないもん……帰らないもん……」

ああ面倒だ

「別に魂が2つ有つてもいいだろ？減るもんじゃねえし、それに地獄だか天国にも迷惑かけるつもつもないし」

「で、でも決まりなのー。」

眼に涙を貯めて今にも泣き出しそうな震えた声
ああ～本当に面倒だ

「だあああーーわかつた、わかつたよ、好きーい！」

「グス……本当に？」

「ああ、ダリイからこの話しさは今日はなし」

それよりも、今は時間が気になつた、
げ！？もう一時限田始まつてゐるし

「ひとつと学校行くぞ」

ひょい

「へ、うわーー？」

ちびっこを脇に抱えるとお闇をでる

「な、なににする！？」

「ああ！？テメHのその足じじゃ走れないだろ、お前軽いし抱えて走つた方が楽なんだよ」

「い、いこよ、一人で動けるから！？」

「じたばた、身体を動かして腕を振りほどこうとする

「どうやってその足で動くんだ？歩けるだらうけど走れないだろ？」

次の瞬間抱えていたコイツの背中から正確には肩甲骨の真ん中らへんからだが

バサツ

と、漆黒の翼が現れた

「飛んで行くからいい！」

腕を払いのけ宙へと浮かぶ

思つたがコレでは人目につくと思い

丁度俺の背丈を越えたところで軽くジャンプして
ちびつこの片足を掴み下へ降ろしてやる

「つねりやーー！」

「え？…………ブギューーー！」

ドスンと顔面から地べたへ落^ハ下^スする

「あ、わらい」

『氣付くとおもいきり下へ降^リるのではなく
振り落とす形になつっていた

「…………い、いたい～」

流石にやつ過ぎたと思いつつ伏せのままのロイシ^ルを起^ハす

「いや本當悪^ル……あ……」

身体をお越してやり顔を見ると額から血が滲み、鼻からほ一筋の赤
い線が

「ふ……ヴ、グス…いだび……」

ああ、ヤツチまつた

罪悪感に刈られながら

またもや、家に入つて救急箱を持つてくる

「…………すまん許せ」

アアーー、俺よこんな時は^ハ免なさいだらうがーー！
素直に謝ろうとしない自分に自己嫌悪する

額に絆創膏をはつつけ鼻にガーゼを詰めてやる

「いだいよおー…………何でこんなことあるの…………」

その視線が痛い、まるで虐めっこを見る田で俺を見る

「すまん……てか人目のある所で飛ぶな、へたに目につけるのは後々
ウザイ」

「な、なんで怒られるの？」

自分でも理不尽なことを言つてゐるのはわかっているが

「ああー！ウザイとりあえず謝ったからな！」

ヒヨイ

「おめでたー！」

色々面倒になつたのでコイツを脇に抱えるとそのままダッシュした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2501d/>

妹と言う名の悪魔{パーフェクトグレード}

2010年12月7日04時12分発行